
白霧町が拓く時

秋途

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白霧町が拓く時

【Nコード】

N7649A

【作者名】

秋途

【あらすじ】

親父の仕事の都合で越した『白霧町』という名前の町。名前の割に普通だと思っていた主人公のスバルは、感情を表に出すのが苦手だった。そんなスバルの前に、とある少女が現れて告げる。『白霧町と言われる意味、説明します』

「……はー」

意外性のあまり溜め息しか出ない。

親父の仕事の都合で引越した『白霧町』なんて幻想ちつくな名前の町。

『ボール行つたぞー!』

『あ痛っ! ……顔面セーフだよ!』

最近の小学生は強くなつたんだな。

とまあ、こんな風にどこを見ても普通の町と変わらない景觀になつてる。

「期待はずれだな……」

てつきり漫画みたいな町かと思つてた。

まあ町つて位だから、特に大きな店もない本当に田舎町みたいだけだな。

『この町は初めて?』

後ろから聞こえた幼い声。

その方に振り向くが姿は見えない。

『もうちょっと下よ』

言われるがままに下を見る。

そこには、オレの肩くらいまでしか無い身長の高い黒髪を持った少女がいた。

「あんたは?」

「名前を聞いてどうするの?」

「いや、まあどうもしないけど」

「元気無いみたいだけど何かあった?」 無表情のまま少女は言葉を紡ぐ。

恐らく心配してるんだろうけど、表情が冷たい感じなもんだから答えにくい。

「引越したばかりだから」

「そう。この町は良い所でしょう?」

「あー、まあ良い所かな」

それを聞くと少女は優しく笑った。

何が嬉しいのか、それともオレの薄いリアクションがおかしかったんだろうか。

「反応薄いんじゃないの?」

「あー、良く言われる」

「耳でも遠いの?」

「いや、別に」

オレは耳が悪いわけじゃない。

ただ、不安なだけだ。

昔から感情を表に出す事が苦手で、人から無愛想なヤツだと誤解されてた。

そいつが、引越した町でも繰り返されたりすんのかと心配なんだよ。

「分かった」

「ん?」

「感情を出さないタイプなんだ」

「……何で分かったんだよ」

「なんとなく」

なんとなくで済ませるのかよ。

「なんとなく心配だね」

「誰を?」

「アンタのこと」

「心配することなんか無い」

「その態度が心配なの」

オレの顔をじっと見上げる少女。

心を見通されるような、精巧に整った顔立ちに似合ってる青い瞳が見える。

「背が高いつてば」

「いや、君が低いんだよ」

「ちゃんとユリって名前があるの」

「黒服黒髪でユリって名前か」

「放つといてよ」

肌の色は白いんだけどな。

「それより、あんたの名前は？」

「別に良いじゃんか」

「ダメ」

「……高梨スバルだ」

「スバルって星の名前じゃない？ なら暗くならないで。もっと輝いててよね」

「言われると思った」

「言つつもりだったから」

そうだったのかよ。

「そろそろ帰るからね」

「ああ」

「……市原ユリは帰るからね」
どうして二回言うんだ。

「……止めるなら今のうちだからね」
止めて欲しかったのかよ。

「……ノリの悪い人」

「最初から言つてただろ」

「ま、良いや。そろそろ五時だし」

「五時になるとマズいのか？」

「うん。姿が消されちゃうから」

なるほど、姿が消される。ってえ？

「意味が分からないんだが……」

「うん。説明してないから」

「なんで」

「めんどくさいし」

ちゃんと説明しといてくれよ。

「消されるって何だ？」

「ダメ。もう行かなくちゃ」

ユリは早口に言うつと布を出した。

それを大きく広げ、オレの視界から自分の姿をかくす様にしている。

「あ。待つ……」

言い終わるよりそれは早かった。

布が落ちると同時、ユリの姿は消失。

それを持ち上げて避けると、コンクリートの地面には一枚の手紙が落ちていた。

「業務連絡失礼します！ この町には私みたいな幽霊が沢山いるかもしれません。」

白霧町と言われる訳、説明します。

霧が出るんですよ。夕方辺りでしょうか。それに幽霊は耐えられないんです。

だから急いで消えました（汗）

暇そうだったので話しかけましたが。

もし悪くなかったら、またスバル君に会いに行っても良いですか？」

オレは、手紙をそつと懐にしまった。

どうやら、白霧町では何か普通じゃない出来事が起きちまうみたいだな。

退屈しなそうだ。

（後書き）

心を開こうとしないスバル。

気まぐれな少女・ユリ。

……世界観が伝われば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7649a/>

白霧町が拓く時

2011年1月4日15時21分発行